

「整形外科疾患における痛みの研究」
を企画して

矢吹省司

福島県立医科大学医学部整形外科

整形外科を訪れる患者の主訴で最も多いのが「痛み」です。厚生労働省が出している国民生活基礎調査の結果を見ても、有訴者が最も高い症状は、内科的な症状ではなく、「腰痛」や「肩こり」といった整形外科的な症状です。この「痛み」について病態を明らかにし有効な診断法や治療法を確立することが、今、整形外科医に求められていると思います。整形外科疾患における痛みに関しては、わかってきた点も多くありますが、わかっていない点もそれ以上にあります。特に、「慢性痛」といわれる頑固な痛みを訴える患者に対する診断と治療に関しては、未解決な点が多く、これらの患者に接する際には頭を悩ますことが少なくありません。

本シンポジウムでは、「整形外科痛みを語る会」のメンバーであり、第一線で痛みに向き合って研究されている方々の中から6人の先生に執筆いただきました。

稲田有史先生(稲田病院)には、complex regional pain syndrome(CRPS)の新しい治療について記載してもらいました。CRPSのタイプ1とタイプ2は、以前はRSD(反射性交感神経ジストロフィ)とカウザルギーと呼ばれていたものに相当します。ここで示された治療が、今後新たな有効な治療法となっていくのではないかと予感させられます。

牛田享宏先生(愛知医大学際的痛みセンター)には、痛みに関する脳の反応について記載してもらいました。整形外科医にとって脳は馴染みが少ない部位です。しかし、「痛み」を理解するには、脳は避けて通れない臓器です。Functional MRI(fMRI)は、「痛み」に対する反応を可視化できるツールです。今後「痛み」を客観的に評価することができる時代が来るかもしれません。

笠井裕一先生(三重大)には、整形外科的疾患患者における慢性痛、特に精神・心理的な要因との関連について記載してもらいました。性格タイプ別の治療、アプローチの方法は、早速試してみたい内容です。慢性痛患者に真摯に対応していくことが、よりよい慢性痛治療の発展につながっていくはずです。

大鳥精司先生(千葉大)には、関節痛と腰痛の発生、伝達のメカニズムについて記載してもらいました。基礎的研究の結果を即臨床で応用することはできないことがほとんどですが、基礎的研究の積み重ねが新しい「痛み」の治療法の発見に繋がっていくと思います。

小畑浩一先生(兵庫医大)には、解剖学的な立場から痛みの基礎研究について記載してもらいました。「痛み」の基礎研究では、動物モデルの痛み関連行動をみますが、それを惹起しているのは何なのかを組織形態学的にアプローチしています。「痛み」研究の一端を感じていただけたと思います。

中塚映政先生(佐賀大)には、生理学的な立場から痛みの基礎研究について記載してもらいました。「痛み」の基礎研究の大きな柱のひとつに電気生理学的な研究があります。どんな評価ができて、どのように臨床と結びついていくのかを感じてください。

6人の先生方の論文を読むと、「痛み」研究の現状がわかると思います。今回の誌上シンポジウムが、「痛み」について読者の理解を深め、さらなる「痛み」研究に役立つものとなれば幸いです。